

り、そのほかに13基が建設中で、さらに4基の計画があるということ。

あなたは知っているだろうか？

柏崎・刈羽原子力発電所（7基・・・合計820万kw）がすべて完成すると、日本で最大の原発基地になることを！ましてや、悪名高い福島第二原発と同型の沸騰水型だということを。ちなみに、新潟－柏崎間は100kmに足りない。チェルノブイリとキエフとの距離に近い。

あなたは知っているだろうか？

人間を含め、生きるものすべての命を未来に伝えてゆくもっとも大切な遺伝子は放射線にすごく弱いということ。ほんの少しの放射線でも、遺伝子は壊される可能

性が高い。遺伝子が壊されると、生れてくる子供は一体どうなるだろう。そのまた子供は・・・？

生物と放射線は、本質的に共存出来ない性質のもの。

例えばオゾン層の破壊・・・

例えば地球の温暖化・・・

例えば食品添加物・・・

例えば・・・

数え上げればきりが無い。そういう状況の中で私たちは生きている訳である。好むと好まざるに関わらず、環境は私たちをほおっておいてはくれない。ほんの少しづつかもしれないが、しかし確実に人間の命がむしばまれている。まず保護すべきは、人間自身ではないであろうか。今、植物よりも人間があぶない！

読書案内

西村三郎 著

『リンネとその使徒たち：探検博物学の夜明け』

人文書院 ￥2,850

学名の二名式命名法を確立した博物学者として、あまりにも有名なカール・リンネ（1707－1778）。彼の多くの弟子たちは、植物分類において師が提唱する「性体系」を信奉し、「使徒」として未知の生物を求めて世界各地へ探検に赴く。

本書ではこうした使徒たちのうち、三人の探検と業績が紹介されている。すなわち、新世界、北アメリカへ渡り、当地の自然や人々の生活を旧世界に広く紹介し、学者としてはまずまず幸福な生涯を送るペール・カルム（1716－1779）。香料の採れる幻の植物を求め、異教徒の支配する灼熱の「Arabia Felix（幸福のアラビア）」をさまよい、志し半ばで悲惨な最期をとげるペール・フォルスコール（1732－1763）。アフリカは喜望峰の植物をきわめ、さらに謎の国「ニッポン」へ渡り、帰国後は師の後継者となるカール・ペーテル・ツェンペリー（1743－1828）。

この三人を紹介しつつ、リンネの野望、すなわち、世界中の生物を整然と体系づけることの進展と挫折を浮き彫りにし、その歴史的意義を明らかにしている。多くの美しいさしえも魅力的である。

現在、全世界で生物は何百万種、高等植物でも二十五万種はあるといわれている。18世紀のリンネはそれを極めて少なく見積もり、高等植物では一万種ぐらいと考えていた。今日から見ると彼の野望は全くの無謀であった。巨大な自然にわずかな人数で立ちむかい、およそ勝つ見込みのない戦いを挑んでいたのだ。しかし、彼らの時代の何と夢多いことよ。世界は未知にあふれ、それを解明するために命さえかけたのである。

今日でさえ、命名されていない生物は極めて多いといわれている。そういう面では、リンネの時代はまだ終わっていないといえよう。生物の多様性は、知る人を倦み疲れさせてしまうほどだ。ところが今や人の手により、年に数千種の割合で生物が減びつつあるという。我々は極めて卑劣な手段で、リンネの野望を達成できるかもしれない。

なお、同じ著者による本書の姉妹編『未知の生物を求めて：探検博物学に輝く三つの星』（平凡社、旧価￥2,300）があり、ルンフィウス、アダンソン、パラスの三人を紹介している。

（笹川通博）